

2017年1月13日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年十二月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和10年1月号初出の「暗黒太陽」「水差」「祖母」(「祖母」・・・『森三郎童話選集 夜長物語』所収)を読みました。

「暗黒太陽(童話)」(森三郎)については、掲載された『赤い鳥』昭和十年一月号の「講話 通信」で、鈴木三重吉が「森君の『暗黒太陽』は、新鮮な空想です。」と書いています。

小学六年生の一郎は、学校で先生に聞いたという「暗黒太陽」について不安に思い、真剣に考えています。一郎は「今ね、目には見えない一つの星がすごい速力で地球の方角へ向って走ってるんだって。その星を仮に暗黒太陽と名づけたの。もう二百三十日立つと暗黒太陽と地球とが衝突するんだって。」と、お父さんや妹、弟たちに説明します。そして、「大自然の前には人間なんてじつに微々たるものねえ。」と先生の言葉を受け売りで話します。するとお父さんが、「お父さんが若いころにも、地球と火星とがぶつかるかと言ってさわいだもんだ」と話します。

この話については、会員の水野日出夫さんから、「これはSF小説の父と呼ばれるイギリスの作家ハーバート・ジョージ・ウェルズが一八九八年に発表した『宇宙戦争』を意識して書かれている」という指摘があり、H.G.ウェルズの話で、会はひとしきり盛り上がりました。調べてみると、一九二九(昭和四)年に木村信児訳の『宇宙戦争』(『世界大衆文学全集24』改造社)が出ていたことも分かりました。

「暗黒太陽」は一九三五(昭和十)年の発表ですから、一九三八年十月に、『宇宙戦争』を脚色したラジオ番組によってアメリカに大騒動を引き起こした事件よりも前のことです。

この「暗黒太陽」については、他の出席者から「三郎さんの作品の中で、お父さんがこんなに話の中心に出てくる作品は珍しいですね。」という感想も出ました。森三郎の作品を続けて読んでみると、毎回出席の皆さんから、三郎作品の特徴を捉えたいろいろな声を聞くことが出来ます。

「暗黒太陽」は、この後、お父さんが子供たちの気持ちを引き立てるように「おひるを食べたらみんなで活動へ行こう」と誘って終わっています。映画の好きな三郎さんです。一九三〇年代前半には子どもも観られる映画が出ていたのでしょう。フランス映画の「にんじん」や「家なき子」も一九三四年には公開されています。時代の空気が伝わってきそうな作品です。

「祖母(童話)」(榎三次)では、おばあさんの部屋の壁に飾られていた、お父さんの弟にあたるおじさんの額入りの大きな写真が、大事な小道具になっています。おじさんは「私」が生まれる前に日露戦争で戦死したのです。いたずらをした時などに、このおじさんの写真が私をにらんでいるように思われて、「私」は「おじさん、ごめんなさい。」と頭を下げます。三郎さんの母方のおじさんが日露戦争に行った人だそうですから、そのおじさんのことも、創作の動機にはあつたかもしれません。

「水差(童話)」(村井安男)は、少年の心の揺れを描いた森三郎の特徴の出た作品です。主人公は、五十銭のものを買って帰るよう頼まれたけれど、四十銭だったので、十銭のおつりがでてしまう、その十銭で、組で流行っていた硯に水を注ぐ瀬戸物の水差を買ってしまう。しかし、あんなに欲しかったのに、ちっともうれしくもない、そこで主人公はどうするか。今の子どもたちも直面しそうな話です。

次回予定 平成29年2月10日(金)午後1時〜3時

『赤い鳥』昭和10年

6月号「蝶々」、8月号「雀とり」、9月号「夜中」